



かんわ Letter vol.9 Mar.2015



こんにちは。緩和ケア普及室です。だいぶ春らしくなってきましたね。PCTに依頼のある患者さんは、13歳以上の思春期の患者さんがとても多いんです。小児は親御さんの代諾で様々な意思決定がされますが「大人でも子どもでもない」時期のケアはやはり皆さん困難感を感じているのかなと思います。チームが介入して、それらの悩み事がスパッと解決されるわけではないのですが、一緒に何かを考えていくことや、ささいな言動や情報を共有することは意義があるのかなと思っています。さて、9人目のメンバー紹介は、コメディカル男子として頑張ってくれている臨床心理士の高野さんです。患者さんとの関わりで困っているけど、精神科に依頼するほどでもないか…ということなど、ラウンド時にお気軽にお声かけくださいね。

臨床心理室 高野則之です。



臨床心理室の高野と申します。今はこども医療センターで勤務を始めてからようやく丸一年を迎えようかというところで、昨年度までは単科の精神病院や総合病院の精神科で働いてきました。

その総合病院での経験です。末期がんと診断されたある中年男性は身寄りもなく、日がな一日ベッド上で動くこともできずぼんやりと過ごされていました。精神科にコンサルトの依頼があってお会いしたのをきっかけに、週に1、2回たわいもないお喋りを楽しんだり、昼食に五目そばを食べに何度か一緒に外出したりしました。ウトウトと

眠るようにしながら静かにお亡くなりになるまで、結局は1年以上に渡ってお部屋を訪ねました。

緩和ケアと臨床心理士という組み合わせを耳にすると、精神的苦痛やスピリチュアルペインといった最も敬遠されがちな領域のことがまず頭に浮かぶ方も多いかもれません。実際、これといった医療機器を扱うことのない私たちは、人間の存在の根源に関わるような深い悩みにさいなまれた方々に対して、受容と傾聴という頼りない小道具だけを胸に秘めて臨むことを求められる場合があります。ですが、幸いにも当センターの緩和ケアチームはいわゆる終末期への対応だけでなく、皆様から広く声を掛けていただいて柔軟かつ迅速に動くことをモットーに、より幅広く子どもたちやご家族の心身の苦痛を和らげることを目指して活動しています。さすがにセンターの外に子どもたちを引っ張り出して一緒に五目そばをととは行かなそうですが、メンバー同士で上手に役割分担をしながら、必ずしも重苦しい緊張感のある状況への対応だけでなく、どのような依頼に対してでもフットワーク軽く応じていきたいと考えています。チームの一員として皆様に、そして目の前の悲しみや苦しみを抱えている方々に多少なりとも力になれば幸いです。

ラウンドのときはチームの後ろの方についてぼんやりした顔で歩いています。緩和ケアに関することはもちろん、どんな小さなことでも構いませんので、何かありましたらぜひお気軽にお知らせください。